

認知症の人の社会生活支援過程

— 一心の世界の共感にもとづく記憶・解釈・欲求・意思の支持となじみの関係づくり —

A Supporting Process for Social Activity of the Alzheimer's Diseased
— Sympathy with a World of Mind, Supporting of Memory, Interpretation,
Desire and Will of Person, and Becoming Familiar Relationship —

喜 多 祐 莊

Masaharu KITA

認知症の人の求め(ニーズ)に的確に対応(サービス)する視点・科学技術・支援過程が求められる。すなわち、①支援者による自己理解にもとづく、対象者本人の心の世界を理解すること、②それを踏まえて、対象者本人と支援者との共感・共有世界・共同活動をつくること、③その体験の強い感動と銘記により、新たな馴染みの記憶・認知・関係が形成されること(「記憶会話同伴銘記法」)、④この技法を用いて認知症の人を理解し支援する「社会生活支援過程」を設定すること、⑤この技法による支援過程を実践できる寄り添い人(びと)(専門家・活動者・家族・学生等)を養成することである。本稿は、①認知症の人を共感的に理解する視点、②認知症の人の求め・記憶・解釈と援助者の役割、③認知症の人の心の働きを理解する方法、④認知症の人に寄り添う「社会生活支援過程」について述べる。

キーワード：認知症の人、アルツハイマー病、現象学的共感的理解、記憶会話同伴銘記法、社会生活支援過程

I 認知症の人の現象学的理解の視点

— 本人の心の世界現象に共感する眼差しをもつ

「私はアルツハイマー病である、といわれた、しかし、私は自分の心をもっている。」これは、本人の切実な叫びである。

本人は、人間の体、人間の感覚、人間の欲求、人間の記憶、人間の意識、人間の意思、人間の感情、人間の理想をもつひとりの人格者である。ただし、本人は遺っている記憶年代の中で「現在」を感じて生きている。

人が言葉を失い、まなざしを閉じ、表情を曇らせると、それを見ている私たちは心配し(care)、心痛し(sorrow)、心悩む(worry)。しかし、その人が了解不能の言動をすると、私たちは恐れ(fear)、嫌い(hate)、避ける(avoid)。認知症の人は、若い年代に戻って、私たちを解釈している。そのことを私たちが理解しないと、その人の言動が了解できなくなる。

その人を私たちが避けようとする、その人の言葉は聞けない。その人の存在を私たちが嫌いだと思うと、その人のまなざしは見えない。その人の行動を私たちが恐れていると、その人の表情の意味が分からない。そうして、その人と会うことが苦痛となり、精神的疲労(stress)が強くなる。また、その人は孤独の淵に沈む。

私たちは、本人の心の叫びに耳傾け、本人の心の働きに共感し、本人の言動に意味を発見しなければならない。

認知症の人は、人間の心をもっている。ただ、日常生活において「記憶」がのこらない。したがって、「記憶」を用いた世界像、相手像、関係像が結べない。それゆえ、本人の中に遺る記憶と推測による相手への解釈によって自分を守るしかない。本人が必死に私たちを特定しようとしていることに私たちは気付かなければならない。

本人のそのような心の世界現象を受け止め、心の世界現象を受け容れ、心の世界現象に入り込んでいくことにより、私たちは本人とともに生きることができる。その原理、方法、技量、作法、態度をしっかり修得することが、「認知症の人に寄り添う人」の学修課題である。

II 認知症の人の社会的な求めに寄り添う専門支援者の役割

1 認知症の人は何を必要としているか

(ニーズ、その1)

認知症の人は何を求めているか？まず最も本質的な求めから考える。

それは、「人間として生きたい」、「自分が何ものであるかをたしかめたい」、「自分が行った結果を味わいたい」、「相手が自分をどう見ているかを知りたい」、「相手とともに生きたい」という求めである。これを具体化すると：

1-1 人間として生きたい

1-2 人間として認められたい

1-3 縁(ゆかり)のある人との絆(きずな)をとりもどしたい (絆がほしい)

2-1 自分が何ものであるかをたしかめたい

2-2 自分が何ものであるかをわかってもらいたい

2-3 自分の役割を発揮させてほしい (お役に立ちたい)

3-1 自分が働いた結果を味わいたい

3-2 自分が働いた結果を味わってほしい。

3-3 味わった相手が喜ぶ姿を見たい (幸せになってほしい)

4-1 相手が自分をどう見ているか知りたい

4-2 相手に自分がどう見えているかを知りたい

4-3 相手と自分の思いを一つにしたい (自分の心を知ってほしい)

5-1 相手とともに居たい

5-2 相手とともに行きたい

5-3 相手とともに休みたい (喜怒哀楽をともにしたい)

2 認知症の人は世界の現象をどのようにとらえるか (ニーズ、その2)

認知症の人を含め私たちは、日常生活の中で自分と世界の間をとりあえようとしている。ここで、本人のこの本源的な求めについて考える。

それは、「己(おのれ)は今どこにいるか?」、「己の知っている人は今どこにいるのか?」、「己が今いる世界で何が起きているのか?」、「己が今いる世界はこれからどうなるのか?」という求めである。これを具体化すると:

1-1 己(おのれ)は今どこにいるのか?

1-2 ここはどこなのか?

1-3 どうしてここにいるのか?

1-4 ここで己は何をしているのか? (自分と世界の関係)

2-1 己が知っている人は今どこにいるのか?

2-2 そこにいるのは誰か?

2-3 そこで何をしているのか?

2-4 その人と己は何をしようとしているのか? (自分と相手との関係)

3-1 己が今いる世界で何が起きているのか?

3-2 そこでは誰が何をしようとしているのか?

3-3 どうしてそんなことをするのか?

3-4 そこでは己は何をしなくてはならないのか? (自分の役割)

4-1 己がいる世界はこれからどうなるのか?

4-2 己は誰と何をすればよいのか?

4-3 それをすれば何が起きるのか?

4-4 それをすれば己とその人はどうなっていくのか? (自分と世界の変化)

3 認知症の人が世界現象の中で安心して居られるには (ニーズ、その3)

認知症の人を含め私たちは、人間関係の中で自分が安心して居れる心の世界を作りだそうとする。この基本的な求めについて考える。

それは、「周りの人が自分をよく知っていること」、「自分が自分のことをよく知っていること」、「自分が嫌なことを分かってもらえること」、「相手が自分の求めていることを支えていてくれること」である。これを具体化すると:

1-1 周りの人が自分をよく知っていること

1-2 自分が自分の過去の経験を知っていること

1-3 自分が自分の現在の気持ちを知っていること

1-4 自分の存在を周りの人が受け入れていること (存在の承認)

2-1 自分が今いる世界をよく知っていること

2-2 自分がどんな生き方をしてきたかを思い出すこと

2-3 自分が今何をしたいかについて分かること

2-4 自分がそれを自分の力で出来るかを考えること (非力の自覚)

3-1 自分がしてほしくないことを周りの人に分かってもらえること

3-2 自分が過去に、嫌いだった経験を周りの人に気付いてもらうこと

3-3 自分が今気になっていることを周りの人に気付いてもらうこと

3-4 自分が恥ずかしいと思うことを言わないでいてくれること (自尊心)

4-1 相手が自分の求めていることを受け入れてくれること

4-2 相手が自分の困っていることに気付いてくれること

4-3 相手が自分のやろうとすることを支持してくれること

4-4 相手が自分の行動に連れ添っていてくれること (寄り添い)

4 認知症の人の困難克服の取り組み方 (テーマ、その1)

認知症の人は、周りの人の承認・理解と相手の気持ち・寄り添いを日常生活の中で求めている。と同時に、本人自身が自らの困難にうちかとうとする努力を続けている。それは、「自分の記憶と眼前の世界が結び付かない」、「自分の記憶と眼前の出来事を結び付けようとする」、「眼前の出来事を処理するために取り組む」ことである。それを具体化すると:

1-1 自分の記憶と眼前の世界が結び付かない

1-2 自分の記憶が部分的に失われてしまっている

1-3 自分が今しがた経験したことが記憶に無い

1-4 自分の記憶再生の内容と眼前の出来事が食い違う

1-5 それでも眼前の出来事を解釈しなければなら
ない (解釈志向)

2-1 自分の記憶に基いて眼前の出来事を解釈し
ようとする

2-2 眼前の出来事の特徴をつかむ

2-3 自分の記憶とその特徴を結び付ける

2-4 その特徴ある出来事の全体像や名前を解釈する

2-5 解釈した出来事に対処すべき記憶を再生する
(記憶再生)

3-1 出来事に対処するための方向を考える

3-2 出来事に対処するための手段を考える

3-3 出来事に対処するための人材を考える

3-4 その人とともに手段を講じて取り組む

3-5 その人とともに取り組んだ結果をたしかめる
(結果確認)

5 認知症の人が孤独感におちいらないでいれる方法は (テーマ、その2)

認知症の人は、最近の記憶をもっていないので、周
りの世界との関わりを自分の力だけではつぐれないでい
る。そのために、孤独感(人も物も時間も場所も見知ら
ぬ世界と感じる)におちいってしまう。そうならないた
めには、本人が周りの人との関係の中で、「自分が今ど
こで誰といるのかを知る」、「周りの人が自分を守って
くれているのを知る」、「自分の周りの世界が消えないこ
とを知る」必要がある。それを具体化すると：

1-1 自分が今どこで誰といるのかを知る

1-2 自分が今いるところが知っているところである

1-3 自分が今一緒にいる人が知っている人である

1-4 自分が一緒にいる人がずっと側にいてくれる

1-5 自分が今いるところが変わらないでいてくれる
(既知性)

2-1 周りの人が自分を守ってくれているのを知る

2-2 周りの人が自分の存在を承認してくれている

2-3 周りの人が自分の役割を期待してくれている

2-4 周りの人が自分の気持ちを分かってくれている

2-5 周りの人が自分の行動を支えていてくれる

(関係性)

3-1 自分の周りの世界が消えないことを知る

3-2 自分の周りの世界が離れていかないでくれる

3-3 自分の周りの世界の記憶が失われないでくれる

3-4 自分の周りの世界の記憶を思い出すことができる

3-5 自分の周りの世界に再び会うことができる

(継続性)

6 認知症の人に寄り添う専門介護福祉士等の役割

(サポート)

認知症の人が、私たちと同じくもっている求め(ニー
ズ1、2、3)と課題(テーマ1、2)は、人間が共同で世
界の中で生活する上で欠かせないことである。それらの

中から、本人に日常的に寄り添いつつ関わる立場の専門
援助者(専門介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、
家族・友人等)が担うべき役割をとり出してみる。

1 専門援助者は本人の記憶体験・気持感情・希望意
思を分かること

(以上、前記3 認知症の人が世界現象の中で安心
して居られるのは、より)

2 専門援助者は本人が記憶と眼前の出来事を結びつ
けるのを支持すること

3 専門援助者は本人とともに眼前の出来事に対処す
る手段を実施してその結果をともに確認すること

(以上、前記4 認知症の人の困難克服の取り組み
方、より)

4 専門援助者は本人と一緒にいる人や今いるところ
が変わらずにいてほしいとねがう本人の気持ちに応え
ること

5 専門援助者は本人の周りの人が自分を守っていて
ほしいとねがう本人の気持ちに応えること

6 専門援助者は本人の周りの世界が消えないでいて
ほしいとねがう本人の気持ちに応えること

(以上、前記5 認知症の人が孤独感におちいら
ないでいれる方法は、より)

7 専門援助者は本人のねがいを分かってほしいとい
う本人の気持ちを周りの人によく伝えること

8 専門援助者は本人が周りの人と共に交流できるよ
うに周りの人々に働きかけること

認知症本人からみて、これらの8項目は、寄り添いび
とである専門介護福祉士等(ソーシャルワーカーやボラ
ンティア)に、ぜひ取り組んでほしい基本項目である。

III 認知症の人の心の働きに寄り添う

1 認知症の人への人間学的理解

私たちは対象者を外見だけで見つめると、その真意が
見えないために、異様(私自身の望ましい言動から外れ
ている、想像を絶するありよう)に感じてしまうことが
ある。認知症の人は、自分の中に遺されている記憶にも
とづいて相手や世界を解釈していて、その記憶再生にお
ける「現在」(本人が今いる瞬間)の世界現象と、外界に
おける「現在」の世界現象とが離れており、本人の中に
ある(昔の)時代に眼前の出来事を位置づけている。

例えば、本人が(実年齢80歳)、60年昔の時代(20歳)
の世界現象を「現在」ととらえているとき、眼前の相手
の人を60年昔の時代にいる人間ととらえつつ、この人
を解釈している。すなわち、本人は自分の本来の夫また
は妻が、「祖父」または「祖母」に見えるのである。

人間は出来事存在と変化を連続の相でとらえるが、
今この瞬間が瞬(またた)く間(ま)に過去の相となり、
それを記憶・再生しつづけることによって、過去の変化
の順次性を認知することができる。その過去の順次の出

来事における最新の記憶内容をたよりにして眼前の出来事の正体を見抜く。すなわち、私が直面している人や出来事を私の記憶の中の人や出来事とつなぐことにより、その人やその出来事を特定することができるのである。認知症の人が遺っている記憶内容を引き出して、相手や出来事を特定するのは至って自然な意識活動である。

援助者がそのように理解すれば、認知症の人の解釈と言動が納得でき、異様に感じなくてすむのである。

2 認知症の人の会話による自己像の形成

私たちは、朝目覚めたとき、瞬間的に自分が今いるところを特定できる。しかしこれは、昨夜寝たときの空間の記憶を再生することによって可能となる。今日が何月何日かも、昨日の記憶を再生することによって可能となる。同様に自分が誰であるかも直近の記憶を再生することによって描ける。

そのように、瞬間的であるが、私たちは自問することによって、遺されている記憶を蘇(よみが)えらせながら現在の自己像を推定しかつ確信しているのである。

認知症の人も同様に、自問することにより、それが可能となる。しかし、自問には動機が必要となる。今日が何月何日何曜日で、自分が何をしている人間で、これから何をしなければならぬかを考えたとき、自分への問いかけが強まる。逆に今ここで何をなすべきかが分からず、途方に暮れているとき、自分への問いかけが弱まる。誰かが本人に直接、あなたは誰か、ここで何をしようとしているのか、誰に何を求めるのかをたずねると、それに促がされて、自分への問いかけが強まる。

他者との会話をとおして、本人が自己像を明確にしつつ表現することができるのである。

3 認知症の人の時代像・家族像・自己像・関係像

認知症の人に、今の時代、今の家族、今の自分、今の縁者について語ってもらうことによって、その人の固有の「現在」の時代像・家族像・自己像・関係像を知ることができる。本人の語りの内容は、本人の馴染みの世界現象を表している。それを基に、私たちは、本人が馴染んでいる居心地のよい環境を整えることが可能になる。

私たちは、本人が「今生きている時代」、「今大切に思っている家族」、「今輝いている自分」、「今必要としている縁者」を理解することによって、本人の「現在」の時代や家族、本人自身や縁者が活動している世界現象にどのように入っていけばよいかが分かるのである。

4 認知症の人の意思・記憶・解釈・目標

人は記憶をもとにして意思を働かせ、意思の力で対象を解釈し、目標をもちつづける。記憶そのものは多様な心の働きを支えている。この多様な心の働きがそれぞれの心の働きを生み、それぞれの心の働きの記憶を強固にしている。

認知症の人は、この多様な心の働きとその働きの記憶を強くもっており、したがって、本人の欲求・意思・目標を支持し励ませば、本人の作業記憶・陳述記憶・意味記憶が働きはじめ、本人の感覚記憶・運動記憶・身体記憶が動員され、本人の生命の源である母との記憶(胎宙記憶)が身心を揺り動かす。

私たちは、このような本人の心の働きと記憶に寄り添うことにより、本人と共感しながら、ともにあゆむことができる。

IV 認知症の人の欲求と記憶に寄り添う総合支援過程

1 認知症の人の人生記憶の発展と人生欲求の発展

認知症の人も私たちも、人生記憶を積み重ねつつ質的に発展させつつ生きてきている。それとともに、人間としての欲求を質的に発展させ重層的に積み上げて生きている。

2 認知症の人の記憶の働きを活性化する方法

認知症の人の記憶の働きを活性化させるには4つの方法がある。記憶会話法、感覚再生法、環境再生法、役割発揮法である。そのいずれも馴染みの関係形成に有効である。

(教材:「認知症の人の心を知る」(全8頁)(おはよう21 2006年1月号、2月号))

3 認知症の人と信頼を強めながらその欲求に寄り添う道筋

認知症の人の存在を肯定しその人生体験を理解しつつ、本人の自我を強化し、自己実現を支え、自らの生命の根源に回帰するのに寄り添い、本人の没後には縁者とともにお供養する。私たちが本人のこのような欲求の展開に十全に寄り添うことにより、相互の信頼関係が深まり、共に歩む道筋を全うすることができる。そのとき、本人と私たちは相互にかけがえのない同行者(二人同行、みちゆき)となるであろう。

4 認知症の人の共同生活指向の意識活動の支援

認知症の人は、記憶細胞が部分的に失われている。とくに、アルツハイマー病の人は、最新の記憶細胞から昔に向かって失われていくために、本人の「最新の記憶内容」が徐々に昔に退行していく。

生活年齢が80歳の人が、最新の記憶内容が30歳だとすると、「私は今、30歳の主婦で、働いている夫と3歳の子と暮らしている」という「自己像・家族像・時代像」が生まれてくる。本人のこのような心の世界を私たちが十分に理解すれば、本人の言葉や行動や感情を納得することができ、本人が解釈する私たちの「役割像」を受け入れることができるようになる。私たちの支持があれ

ば、本人の自己決定・役割発揮・感動体験・長期記憶形成という「主体的意識的な生活過程」が復活し、本人の「新たな馴染みの人・仕事・居場所」が形成される。本人は私たちとの間で、このような共同生活を作りたいと強く望んでいる。

すなわち、認知症（とくにアルツハイマー病）の人がその持てる遺存記憶細胞の働きと人生体験を蘇えらせて「現在像」を作り、支援者がその「現在像」を受け入れて「もとからある馴染みの関係」を再生したうえで、本人と支援者の記憶会話同伴共感によって「新たな馴染みの世界」を作る、という共同生活指向の意識活動を支えることが「社会生活支援過程」の特質である。

5 共同生活指向の意識活動を支援する諸科学

本人の共同生活指向の意識活動を支援する諸科学を見ていくと、

- ① 保健学：健康の領域で、認知症は記憶細胞の部分的消失。ただし遺っている記憶細胞は健康である。
 - ② 人間学：人格の領域で、人生体験の豊かな記憶、感覚・感情・意思・希望を抱く人間である。
 - ③ 認知学：意識の領域で、遺されている記憶年代の「現在」の中で眼前の事象を位置づけて解釈する。
- これら①②③は、認知症の人の内的世界である現象学的〈主観〉の科学である。
- ④ 関係学：関係作りにおいて、支援者は本人が解釈する役割関係を受け入れて参加すること。
 - ⑤ 教育学：能力形成において、本人の感動体験が長期記憶になり、新たな馴染みの世界が生まれる。
 - ⑥ 環境学：環境作りにおいて、本人の馴染みの環境づくり、居場所作り、地域各世代間交流文化伝達をする。

これら④⑤⑥は、認知症の人と寄り添い人（びと）との共有の世界である現象学的〈共主観〉の科学である。

これを図にまとめる（図1 認知症の人と寄り添いびとが共生するための科学）。

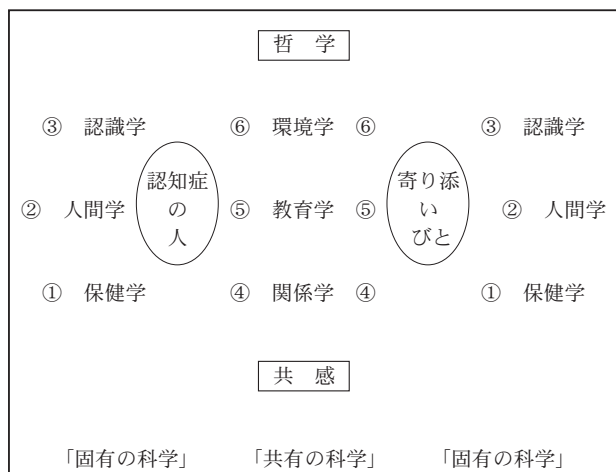


図1 認知症の人と寄り添いびとが共生するための科学

図1の中で、「固有の科学」は、本人と寄り添い人（びと）、それぞれの内的世界である〈主観〉を表し、また、「共有の科学」は、本人と寄り添い人（びと）が直接関わり合いながら作る共有の世界である〈共主観〉を表している。

図の中で、「共感」は本人と寄り添いびとが信頼・好意を寄せ合う実践の絆 (bond of trust) であり、「哲学」は両者が意識活動を交流させる過程を理解するための認識の枠組み (framework) である。

とくに、認知症の人の自己確立と関係作りの意識過程の査定（アセスメント）、すなわち、本人が共同生活に向けてその意識の内部で形成されている世界がどのようなものであるかを査定（アセスメント）することが大切である。（図2 記憶障害者の自己確立と関係形成の課題領域）

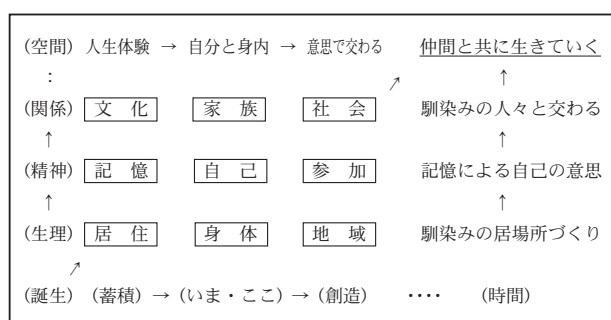


図2 記憶障害者の自己確立と関係形成の課題領域

図2の中で、左側の「居住」「記憶」「文化」の領域は、本人が体験した馴染みの世界であり、中央の「身体」「自己」「家族」の領域は、本人がいま・ここで動きつつある世界であり、右側の「地域」「参加」「社会」の領域は、本人がこれから創ろうとする世界である。

図2の中で、下層は、本人を支える自然、中層は、本人を動かす意思、上層は、本人を生かす人々である。すなわち、本人は自然に支えられ、意思により動き、人々により生かされているのである。

図2全体は、左下の「誕生」以来、本人の中で横軸（時間）と縦軸（空間）の諸領域が整っていった、右上の「仲間と共に生きていく」ことが成立する（時空における新しい事象の創出）ことを示している。

つぎに、認知症の人の課題領域を支える学芸の修得、すなわち、認知症の人が自己を確立し、人々と関係を結んで、共に生きていくことを支援する「寄り添いびと」には、本人の各課題に具体的に対応する使命がある。

その課題を列挙すると、

| 〔課題領域〕 | 〔課題内容〕 |
|-----------|-----------------------|
| 「生活」・「介護」 | 家事・家計 栄養・介助 |
| 「健康」・「医薬」 | 生理・保健 療養・リハビリテーション |

「共感関係」・「記憶」 心理・共感
 発達・教育
 「人間」・「家族」 歴史・人類
 「文化」・「社会」 文学・芸術
 リクリエーション・スポーツ
 「実践研究」・「共生」 研究・交流
 実践・記録
 寄り添い人(びと)になるには、これらの〔課題内容〕
 について系統的に修得する必要がある。

6 共同生活形成の「社会生活支援過程」の展開

認知症の人の意思と希望を支えて、本人・家族・友人・職員・地域住民各世代との共同生活を再生するためには、本人の意識活動の過程に寄り添いつつ、本人の意思や希望を人々に伝えつつ、かつ、本人と周りの人々の記憶会話同伴を支援しつつ、本人や家族と地域各世代との交流・文化伝達を推進する取り組みが求められる。

そして、地域全体が認知症の本人を中心にした「馴染みのふるさと」になるように、意識的に推進する「寄り添い人」養成運動が必須であり、かれらの役割は大きい。

また、認知症の本人の共同生活指向の意識活動に寄り添い、家庭・社会・文化的な役割発揮を支え、交流・感動・馴染みの関係作りを、計画的段階的に展開することが必要である(図3 認知症の人の共同生活形成のための社会生活支援過程)。

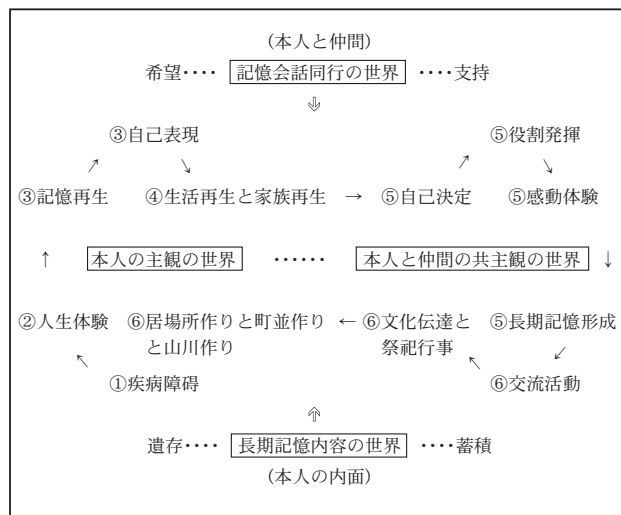


図3 認知症の人の共同生活形成のための社会生活支援過程

この各段階の目標と内容は次のとおりである。

I 段階(アセスメントと信頼関係形成)：

目標「本人の内的世界の確立」

- ①疾病障害の理解(保健学)、
- ②人生体験の理解(人間学)、
- ③記憶再生と自己表現(認識学)

II 段階(なじみの生活の復活・維持)：

目標「本人と寄り添いびととの相互関係」

- ④生活文化と家族の再創造(関係学)、
- ⑤自己決定・役割発揮・感動体験・長期記憶形成(教育学)

III 段階(新たな馴染みの世界の形成)：

目標「本人・家族・友人等と住民各世代の交流」

- ⑥交流活動・文化伝達・祭祀行事・居場所作り・町並み作り・山川自然作り(環境学)

結び

以上の考察を基礎にして、筆者は次の課題である、「認知症の人の寄り添い人(びと)」(専門家・活動者・家族・学生等のソーシャルワーカーとボランティア)養成のカリキュラの具体化に取り組みたい。

当面、計画しているのは、寄り添い人(びと)養成講座、認知症専門介護福祉士養成講座、認知症寄り添い支援ソーシャルワーカー養成講座の三類型である。(内容は別稿に委ねたい。)

参考文献(本稿の考察の原資料)

- 1) 平成13年度「痴呆専門介護福祉士(高齢者)」養成教育に関する報告書、痴呆専門介護福祉士(高齢者)養成教育研究会、2002
- 2) 痴呆性高齢者の記憶再生による生活共生の援助技術ー人生回想・共同語りによる自己統合・関係形成・自己実現ー、平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基礎研究(B)(2))研究成果報告書(14310097)、研究代表者 喜多祐荘、2005
- 3) 喜多祐荘「認知症の人の心を知る」(おはよう21、2006年1月号、2月号)
- 4) 認知症の人と馴染みの関係をつくるー人生体験に基づく語らいふれあいささえあいー、平成16ー18年度財団法人みずほ教育福祉財団助成研究、認知症老人の遺存能力開発援助技術研究会、2007
- 5) 喜多祐荘「認知症の人の意識活動に寄り添う過程」研究紀要第10号、2009年3月、中部学院大学・同短期大学部
- 6) 喜多祐荘、川上正夫、廣池利邦、足立昭一、足立由美子、安藤嘉洋「認知症の人を支援する思想と社会づくりー実践、教育の方法を考える」(こころの健康第24巻第1号、2009年6月、日本精神衛生学会)
- 7) 室伏君士「老年精神疾患へのアプローチ」、金鋼出版、1993
- 8) 三宅剛「人間存在論」、講談社、2008